たまに行くならこんな施設

このコーナーでは、県内各地の育児や生活、市民活動支援の施設を紹介いたします。「たまに行くなら～」と銘打ちましたが、何回行っても飽きない施設です。

ピュアネットライブラリー（山口県婦人教育文化会館内）

山口県婦人教育文化会館は、昭和35年に開館しました。昭和62年に新会館に生まれ変わり、婦人の自立と社会参加を進めるための学習や活動を支援している施設で、カリエンテ山口として親しまれています。

やまぐち女性財団の情報誌やホームページに紹介している本はすべて、ここカリエンテ山口1階ロビーの大ホールに沿った本棚に開架されています。

行ってみて本を探すのも良し、読みたい本を前もってホームページから検索して行くのも良し。利用（貸出）方法も簡単です。窓口に行けば職員が手続きします。

カリエンテ山口にお越しの際には、ピュアネットライブラリーに是非お立ち寄りください。

（取材：藤原）

ピュアネットライブラリー貸出し方法

1 新規登録者の方法

「利用者登録申請書」に住所・氏名・電話番号・所属団体を記入。

2 貸出し方法

貸出しカードに必要事項を記入。1人5冊まで借りられます。

3 返却方法

貸出し期間は原則として2週間。窓口に持参し返却してください。

ピュアネットライブラリー書架

■利用案内

利用時間:午前9時～午後9時

※ 8月14～16日、12月29～1月5日は利用できません。

■所在地

山口市湯田温泉5丁目1－1　カリエンテ山口内

TEL：083-922-2792

E-mail：caliente@alpha.ocn.ne.jp

HP：http://www12.ocn.ne.jp/~caliente/

■アクセス

JR山陽本線・新幹線新山口駅から定期バス　20分

湯田温泉バス停から徒歩　6分

JR山口線湯田温泉駅から徒歩　15分

健康づくり

こころをゆるりと

臨床心理士　今井佳子（いまいよしこ）

夫には私が入り込めないほどの相思相愛の「女性」がいます。（ご安心ください。ドロドロの離婚劇にはなりませんので）名前はチョコ。勘の鋭い方はお分かりでしょう。その「女性」とは我が家の愛犬のことです。

そのチョコが先日「ストレス性の大腸炎」にかかってしまいました。症状は、水のような便と嘔吐。約一週間、苦しみました。その原因が、なんと夫の不在なのです。

私もチョコが熱愛する夫の代わりをしようと努力をしました。赤ちゃんのように抱っこしてあやしたり、一緒に添い寝をしてやったり、「チョコちゃん好きだよ」と声をかけてやったり。お笑いください。精一杯甘やかしました。でも、淋しさというストレスにはどうすることもできませんでした。

ストレス社会という言葉を聞いて何年が経つでしょう。職場で、学校で、家庭で、ありとあらゆる場所でストレスを抱えながら生活をしています。全てのストレスが悪いわけではなく、適度なストレスは生活に張りをもたらします。あまりストレスをマイナスに考え過ぎると何もできなくなるのも事実。しかし、ストレスを大きく深くためこみますと誰でも精神的な病気に。ストレス解消、必要ですね。

そうそう、言い忘れるところでした。我が家のチョコ、夫の顔を見るなり全快しました。

人財彩時記

山口県ゆかりの輝く女性を紹介します

髙樹（たかぎ）　のぶ子（こ）さん

1946年　山口県防府市生まれ
1980年　「その細き道」にて作家としてデビュー
1984年　「光抱く友よ」にて第90回芥川賞受賞
1995年　「水脈」にて女流文学賞を受賞
2005年　九州大学アジア総合政策センター特任教授就任
2009年　紫綬褒章受章　山口ふるさと大使就任

幼少期のご自身についてお尋ねすると、「とにかくがむしゃらだったわね。」と自伝的著作「マイマイ新子」の主人公そのものだったご様子。

髙樹さんの作品は、そのときの気分で多種多様なテーマが生まれるそうです。恋愛小説では、人間の最も美しい部分がテーマとなり、時代の正確さを大切にした「マイマイ新子」では、ご自身の子ども時代である昭和30年代を残したいという思いがつまっています。

作家という職業と家庭の両立、いわゆるワーク・ライフ・バランスについておたずねしたところ、文章を書いていると家事が気になったり、家事をしていると文章が書きたくなったり、ずっと同じところにいるより、行ったりきたりするのが好きなので、自然にバランスを保っているという感じだそうです。また、ご家族の協力については、「今のところ夫が台所に立つことはないですね。お互い得意なところが違いますし、こうあるべきだということではなく、得意・不得意を補いあえればいいと思っています。」と話されました。

最近では、アジアの国々に触れてこられたことで、「日本は色々な意味で優れている国だし、みんなからうらやましがられている国」と実感されているとか。たとえば、女性の視点で考えたとき、中高年の女性が女性として生き生きしている、いわゆる女性が長く女性でいられるという文化を持っているというのもその理由のひとつだそうです。

最後にメッセージをお願いしたところ、「山口の女性は、民謡『男なら』の歌詞にあるように気が強く男勝りで、男にまかせておけない、自分で物事を成し遂げたいという強さがあると思います。その誇りを、大事にしてほしい。」と結ばれました。

言葉ひとつひとつがとても丁寧で話す相手への配慮を忘れない髙樹さん、ますますのご活躍を期待しています。

（取材：原田、文：松井）

©2009　髙樹のぶ子・マガジンハウス/「マイマイ新子」製作委員会

Pure Column　ピュアコラム

文●藤谷清美（ふじたにきよみ）

昨夏、突然義母が自宅で亡くなった。大して持病も無く好きなテレビドラマを見た後、庭の花を摘んで家に入り、長男である夫の前で96年の人生を終えた。大往生で羨ましいと皆さんが言われる。

封建的な環境に育った姑のところに、広島市で働いていた私が嫁いできたのだから、お互いに戸惑うことが結構多かった。「男はオトコーと言うて功がある、女はオナゴー言うて業がある」と男尊女卑の思想の塊のような義母に時には反抗もした。

しかし、折に触れて聴く義母の話や生き方を思い起こすと、必ずしもそういう「女」の部分に甘んずるのではなく「自分」と言うものをしっかり持って生きてきたことが窺える。

好きも嫌いも無く親が決めた相手に嫁ぎ、来てみれば異母弟妹が5人もおり、そのうちに舅、姑が病死したため、親代わりとなって戦後の混乱期にそれぞれを結婚させ、我が子4人を進学させた。そのような中で自身も婦人会活動に積極的に参加し、50歳で始めた墨絵は日本画に進み、沢山の作品を残している。

自分の環境が負の場合にあっても常に前向きで、プラスに換えて生きてきた義母。没後、整理した際に出てきたメモには「一生懸命生きてきたから私は後悔しない。」とあった。

「これからは女性もどんどん可能性を試さねば」と、常に私の背中を押してくれ、働く私に代わって孫の養育にも熱心だった。

40年同居した義母の生き様を見てきて、今更ながら「幸せな生き方」を考えさせられている昨今である。